

韓国における『天地八陽神呪経』の靈的機能

佐 藤 厚

〔概要〕

『天地八陽神呪経』は、8世紀頃に成立したとされる中国成立経典（いわゆる偽経）で、経典読誦による功德を説き、東アジアから中央アジアにわたる広い地域で流行した。朝鮮半島でも現在に至るまで流行している。本稿では朝鮮における流行の背景を探るため、『八陽経』にどのような力＝「靈的機能」があると考えられたかを、『八陽経』自体と『八陽経』をめぐる言説にわけて考察した。

結論は次の通りである。①『八陽経』自身が説く靈的機能の中心は、土地家屋関係と葬祭日程関係の二つである。②朝鮮で作られたと考えられる序文もこれを継承するとともに、八部神衆の働きを強調する。③18世紀に朝鮮で作られた「八陽経密伝」では、現世富貴と死後の善処への往生を説く。④その他、鬼神（幽霊）退散、「死後の世界」への影響力といった靈的機能が付加されるようになった。これが朝鮮半島で『八陽経』が流行した姿である。

1 問題の所在

『天地八陽神呪経』（以下『八陽経』）は、8世紀頃に成立したとされる中国成立経典（いわゆる偽経）で、東アジアから中央アジアにわたるアジア地域で広く流布した経典である¹。中でも朝鮮半島では、現在でも重要視され「生きた」経典である²。

筆者は2018年に北京で開催された日中韓三カ国仏教学術会議に参加し、共通テーマ「東アジア仏教における偽経」のもと、「朝鮮半島に於ける『天地八陽神呪経』の流通と特徴」という発表を行い、朝鮮時代に刊行された刊本の変遷をもとに流行の特徴を論じた³。

1 『八陽経』の研究史については、佐藤厚「朝鮮半島における偽経『天地八陽神呪経』の流通と特徴」（『東アジア仏教学術論集』8号、東洋大学東洋学研究所、2020年）

2 朝鮮時代には数多くの刊本、写本が製作され、19世紀には本経唯一の注釈も作られた。また本経は僧侶だけでなく巫覡や盲僧などによっても唱えられた。それを象徴するように、韓国語に「盲僧が八陽経を唱えるように」という諺がある。これは「意味もわからずぶつぶつ声に出している」という意味である。この諺の成立時期はわからないが本経の流行を物語る証拠である。さらに本経の流行は現在の韓国でも続いている。2000年以後に限っても、読誦や写経用あるいは解説の本が6冊刊行され、僧侶の読経のカセットテープやCDも8種類発売されている。また仏教系新聞によれば、本経は在家信者が読誦あるいは勉強する経典の第7位であるという。

3 その際の結論を提示すると次の4点にまとめられる。1.17世紀までは、おおむね「仏説広本太歳経」を表題とする偽疑経典群の一つとして刊行されていたが、18世紀以後は「八陽経」を表題とした刊本が刊行される傾向があった。これは「八陽経」が重視されるようになったことが反映したと考えられる。

その作業を行う中で筆者はなぜ『八陽経』がそのように流行したのかという問題に関心を持つようになった。普通に考えれば、流行した理由は『八陽経』が人々の要望に応えたからであろう。ではどのような要望に応え、どのような力を発揮したのか。本稿ではこの力のことを「霊的機能」と呼び考察を行う。

霊的機能とは、経典がある文化圏の中で果たす不思議な「はたらき」のことをいう。例えば、病気平癒、所願成就などである。一般にそれらは「霊験」などと呼ばれるが、ここで『八陽経』の「霊験」というと、『八陽経』を信じているようなニュアンスになるので、あえて「霊的機能」という造語を使った。この「霊的機能」は、経典自身で説くものと同じ場合もあるし、経典には説かれぬ独自の内容の場合もある。これを明らかにすることが、仏教の受容を解明する上で重要なポイントになると考える。また、その経典が力を発揮するのは、その文化圏の中で経典に対する共通認識があるからである。たとえば『八陽経』は朝鮮半島では効力があるかもしれないが、日本ではないかもしれない。それは『八陽経』の霊的機能についての共通認識がないからである。こうした調査を進めることにより、韓国という文化圏の仏教観の解明に近づくことが期待される。

では『八陽経』の霊的機能はどのようなものであろうか。現代の韓国に天地八陽神呪経会という会があり、その会長であるチョンチョン氏が本の中で『八陽経』の力を次のように述べる。

昔から『天地八陽神呪経』は、仏様が「この経文を聞くものや聞いた人が脇にいてもこの人は八部神将が擁護し、雑鬼雑神が犯すことができず、すべての災難も消滅する」といわれるので、ましてや直接この経典を読み、心をこめると、帝釈天皇もこの人を助けるといいます。それゆえ、この経典を、家に病苦があったりあるいは引越しをしたとき、家の増改築をした時、動土（人間に災いをもたらす土の神）が消滅し、またどんなに悪いことばかりおきる家でも、この経文を三回だけ読誦すれば、むしろ万福が入る吉家に変わり、またどんな災難が来てもこの経文を三回だけ唱えれば、災難が消滅し諸福となり栄華を享受することができます。⁴

ここでは①霊的存在の守護、②病苦の解決、③引越し増改築といった家関係、④悪家を

そして19世紀前後に最も活発に刊行された。2. 時期による書式形態の変化を分類してその変化を探ると、①漢字だけ→②漢字にハングルを小さく併記→③漢字とハングルと同じ大きさで併記であり、ハングルの存在が大きくなる。これは読誦経典としての意味が強まることであると考えた。3. 1549年神興寺本から1791年松広寺本までは序文が付いている。その内容は、本経の呪術経典としての性格を強調するものである。本経に説かれていた仏教思想の部分は反映されていない。4. 1789年の松広寺本にだけ付される「八陽経密伝」は、様々な階層の五人の人物を登場させ、彼ら彼女らが本経の読誦により、長寿、来世での良い所への転生、現世での富などを得たことが説かれていた。この密伝が付されたのは、八陽経の刊行が盛んだった時期と重なる。

4 チョンチョンヌム『天地八陽神呪経』（天地八陽神呪経会、1993年）

吉家に転換する、という霊的機能が説かれる。こうした功德を一旦、代表的な例とし、これがどのような過程を経て説かれるようになったのかを、『八陽経』自体からはじめ、近代にいたる『八陽経』の力を説くいくつかの文献をもとに考察する。

本論の構成は、第二節で『八陽経』自体が説く霊的機能を見、第三節で朝鮮半島の中で説かれた霊的機能を紹介する。

2 『八陽経』自体が説く霊的機能

『八陽経』は、無碍菩薩を上座として説法が行われ、その中では經典の読誦により様々な効果があることを説く。それは次の4つにまとめられる。

- (1) 淫欲や口業など人間自身が抱える問題の改善である。具体的には、造業造悪、淫欲、口業である。
- (2) 人間を苦しめる状況からの脱却である。具体的には、官吏や盗賊による捕縛、火や水による被害、死後の父母の墮地獄という状況を脱却させる。
- (3) 人間に害を与えるかもしれない存在の対治である。具体的には、邪魔外道および魑魅魍魎など、日遊月殺などである。
- (4) 人生の節目における幸福である。具体的には、結婚、出産、葬儀、初登庁、新居への入居という場面である。

これらの中、(1)は個人の改善を説くものであり、(2)の他者から苦しみの脱却は『観音経』と同じ趣旨のものが多く、本経が大乗經典の中の衆生救済の流れを受けたものであることがわかる。この經典が独自性を持つのは(3)、(4)である。

(3)では庶民が怖れていた悪鬼や、民間信仰や道教での神々を対象とし、それよりも本経の力が強いことを説く。(4)は自然の摂理といえるものを背景として、人為的な考え方である占術や風水地理説などの土俗的呪術への批判を行う。

この4つの中、『八陽経』が流行したのは、独自性を持つ(3)、(4)による。これが特に朝鮮の人々に歓迎されたのは、1931年に高橋亨が解説しているように⁵、寺院勢力が、朝鮮の社会に大きな影響力を持つ風水地理説の唱える凶災を、仏教の修法と法力によって除き、吉祥を招くことができると強調したからである。

3 韓国における『八陽経』の霊的機能

ここからは韓国という文化圏における『八陽経』の霊的機能について、1序文、2「八陽経密伝」、3近現代の霊的機能の3つに分けて検討する。

5 高橋亨「朝鮮墳墓の齋宮と天地八陽経」(『宗教研究』新8-1、1931年)

3-1 序文

朝鮮で流通した『八陽経』には序文が付いている。これは現在のところ中国での流通本には見られないため、朝鮮半島独自の特徴と考えられる。これは朝鮮半島に伝わる刊本の中でも最古の刊本である1549年神興寺本から1791年松広寺本までに見られ、1795年の仏巖寺本からは付けられない。

内容は対句を用いながら本経の呪力を強調したものである。ここでは現代語訳を示し原文は注記した⁶。なお理解の便宜をはかるため、分科のための記号を付けた。〔〕は現代語訳に際しての補いである。

仏説天地八陽神呪経とは、(A1) 日月星宿は明らかであって四節(春夏秋冬)を示し、(A2) 八部神将は威厳を持ち〔木、火、土、金、水の〕五行と〔道教の護法神である〕六甲を示す。(B1)〔日月星宿の属性である〕明明は虚空にかがやき、〔それにより〕一切の鬼魅は界外に完全に消滅する。(B2)〔八部神将の属性である〕巖巖は五方(中央と東・西・南・北)に列敷し、〔それにより〕悪賊怨敵は家裡に息むことを求めるようになる。

(C1) それゆえ〔『八陽経』に問者として登場する〕無礙菩薩は、有為の法を興そうとして長短の諸事を述べると、〔それに対して〕仏は解脱方便をもって答えた。(C2) 一方、〔もう一人の問者である〕無辺身菩薩は、疑悔の心を除こうとして〔仏に〕経卷の勝益を請うと、仏は讚毀罪福をもって説いた。

(D1) さらに、〔この經典を〕敬信する人は、諸悪、過難を解脱し、療腫を消滅する。(D2) 一方、〔この經典を〕受持する人は、永く邪鬼、横神を離れて富貴になる。

(E1) それゆえ〔この經典は〕役人から捕まえられたり、父母の三途の苦しみを遠ざける般若の利刀であり、(E2) 殯葬の日時と産生が簡単に速やかに行われる無礙の仙業なのである。

(F1) この經典を読み、その後に結婚すれば、もし〔占いで〕姓氏が合わなくとも男女は百歳まで生き、仲睦まじいことは長く続く。(F2)〔この經典を〕礼拝すれば、その後、墓を造成するときに〔占いで〕方角などを問わず、この世の福は定まり吉祥

6 「仏説天地八陽神呪経者、(A1) 夫日月星宿、明明示於四節、(A2) 八部神将、巖巖顯於五行六甲。(B1) 明明、朗曜於虚空、一切鬼魅、殄滅於界外、(B2) 巖巖、列敷於五方、悪賊怨敵、求息於家裡。(C1) 是故無礙菩薩、欲興有為法、啓於長短諸事、仏以解脱方便答、(C2) 無辺身菩薩、欲除疑悔心、請於経卷勝益、仏以讚毀罪福説。(D1) 加又、敬信人、解脱諸悪過難、消滅療腫、(D2) 受持者、永離邪鬼横神、致容富貴。(E1) 是故、欲令遠離懸官之繫執、父母三途苦、般若利刀、(E2) 欲令獲得殯葬之日時、産生易速事、無礙仙業。(F1) 読此経、然後、交会婚媾、不和姓氏、男女当百歳、和穆長遠、(F2) 作礼拝、己竟、成造墓田、不問方地、世福定吉祥、家富人興。(G1) 今此経者、斯乃天地諸聖、所帰敬、(G2) 護家神王、所仰信也。(H1) 是故、八大菩薩頂戴於経卷、衛護説経法師、(H2) 見執邪神、宣暢於神呪、摧伏穢身悪心。(I1) 是故依於此経、如法之後、無有悪方害地、(I2) 周於三卷、七徧之次、永無凶日禍時。(J1) 然後、動土築垣、而邪神不住、(J2) 捨古建新、而悪鬼不至。(K1) 退於禍害、進於絶命、無不吉徳。(K2) 犯於大歳、執於歳破、不能損害。(L1) 天地蕩蕩、並勝業所感、(L2) 八方曠曠、皆殊福所致。曰仏説天地八陽神呪経。」(『八陽経』朝鮮刊本)

であり、家は富み人は興る。

(G1) いまこの經典は、天地の諸聖が帰敬するものであり、(G2) 護家神王が仰ぎ信じるものである。(H1) それゆえに八大菩薩は経巻を頭に載せて読経の法師を衛護し、(H2) 見執の邪神は神呪を宣暢して穢身の悪心を摧き伏せる。

(I1) それゆえこの經典により、その教えの通りに行えば、悪い方角や人を害する土地などは存在せず、(I2) 三回読誦し、七回読誦した後は、凶日、禍時は永遠に存在しない。

(J1) その後に土地を動いたり垣を築いたりしても邪神は住まず、(J2) 古い家を捨てて新しい建物を建てても悪鬼は寄って来ない。(K1) 禍害を退け、絶命に進んでも吉徳でないものはない。(K2) [陰陽家で説く八將軍の一つで、木星をつかさどり、悪い方角を示す] 太歳を犯したとしても、[土星を司り、乗船、転居などを忌むとされる] 歳破に執したとしても害を被ることはない。

(L1) 天地は廣大であり〔それは〕勝れた業の結果であり、(L2) 八方は広々としており、〔それは〕みな殊福が致るところである。

ゆえに天地八陽神呪経というのである。

内容を概観する。まず最初の (A1) 日月星宿と (A2) 八部神将は、この文章の根本原理を示す。続いてそれぞれの性質を (B1) 明明、(B2) 巖巖という言葉で表し、それらが邪悪なものを対治すると述べる。この中、日月は本文に出るもので自然の摂理である。それに対して八部神将は、これを八部衆と考えれば本文に出るが、ここで説かれるような活躍はしていない。またそれが (A2) では五行、六甲を示すとあるが、これは本経では退けた占術と思われ、内容と合致しないように思う。これについて筆者は、この八部神将とは仏教的に見せた神将信仰ではないかと考える。神将とは道教に由来し、五方神将と呼ばれ、東西南北中央の五方を守護する。このように考えると、(B2) に出る「五方」とも通ずると思われる。

(C1) (C2) では、仏に質問する菩薩である無礙菩薩と無辺身菩薩が出る。これは經典と同じである。(D1)、(D2) では、それぞれ敬信の人、受持する人に対する功德が説かれる。

(E1) (E2) でも功德が説かれる。(E1) の「官吏から捉われ」、「父母の三途の苦」は本文に説かれる。(E2) の「殯葬の日時」と「産生が易速」も本文に説かれる。(F1) (F2) でも功德が説かれる。(F1) の結婚に関すること、(F2) の墓の造成についても本文で触れられる。

(G1) (G2) は本経を守護する存在について述べる。(G1) では天地の諸聖、(G2) では護家神王である。この護家神王は本文では見ない。(H1) (H2) はその具体例である。(H1)

には八大菩薩が出るが、これは本文に出る。(H2)の見執の邪神とは何を指すか不明である。

(I1) (I2) は功德のまとめである。(I1) では土地という空間的な面をいい、(I2) では読誦すれば凶日、禍時はないという時間的な面をいう。(J1) (J2) は土地と家屋についての功德であり本文に説かれる。(K1) (K2) も功德である。(L1) (L2) は全体のまとめである。(L1) では天地の広大さ、(L2) では八方の広大さを説く。

この中、霊的機能の中心となるのは功德のまとめとして説かれる (I1) (I2) であり、これらは『八陽経』自身と同じように、土地建物関係と葬祭日程関係の二つであることがわかる。また冒頭で説かれる八部神将のはたらきを強調していることも注意される。

3-2 「八陽経密伝」

続いて「八陽経密伝」を取り上げる。これは朝鮮で刊行された『八陽経』の中、1791年刊行の松広寺本にだけ見られるものであり、筆者は『八陽経』ブームが起きた中で、『八陽経』を広めるために作られたものであると考えている。ここでは土地建物関係と葬祭日程関係は説かれず、別の機能を強調する。以下、内容を現代語訳して示し、原文は注記した⁷。なお理解の便宜をはかるため、分科のための記号を付けた。

天地八陽経密伝

(A) 新羅国の三朝法師が唐国に入り、西天国、大聖国の義浄三蔵の教文を伝えた。

(B1) 大聖国の大富長者は二十歳の時にこの法を附け、『八陽経』と『般若心経』とをそれぞれ三万巻読み、四百年を過ごし、命が終った後には兜利天に生れた。生前には富一万三千石を持っていた。

(B2) 唐国の塩和尚はこの法を附け、『八陽経』を十万巻読み、仏の真身に見えて八位を得た。

(B3) 唐国の則員相公は述べた。「私は生前、この法を附け、『八陽経』を三十万巻読むと、神通力を得て天上を往来し、大蔵経に無礙であった。衆神は倍す私を奉り、明らかに三世を知った」と。

(B4) 西天国の真表王は、二十八歳で宝位に居り、この法を附け、『八陽経』百万巻を読むと、宝位に三百年いた。終身の後には大梵天王として生れた。

7 「天地八陽経密伝」「天地八陽経密伝、(A) 新羅国三朝法師、入唐国、伝得西天国大聖国義浄三蔵教文。(B1) 大聖国大富長者、年二十、附此法、読八陽経、般若心経各三万巻、居四百年、命終後、生兜利天、在世、有富一万三千石。(B2) 唐国塩和尚、附此法、読八陽十萬巻、見仏真身、得八位。(B3) 唐国則員相公言、我生前、附此法、読八陽経三十万巻、即得神通、往来天上、無礙大蔵、衆神倍奉、明知三世。(B4) 西天国真表王、時年二十八、居宝位、附此法読八陽経百万巻、居宝位三百年、終身後、生大梵天王。(B5) 唐登州金顔娘、年十八、附此法、読八陽経、般若心経、三年内、各読一万巻、在世一百二年、儲合穀食四十万石。(C) 義浄三蔵和尚、文殊菩薩化名。」テキストは松広寺刊本である。

(B5) 唐の登州の金顔の娘は十八歳でこの法を附け、『八陽経』、『般若心経』を三年のうちそれぞれ一万巻読んだ。世に在ること一百二年で、穀食を四十万石たくわえた。

(C) 義浄三蔵和尚は文殊菩薩の化名である。

まず (A) では本経の朝鮮半島への伝来を記す。入唐した本経を伝えた僧侶を新羅国の三朝法師とするが、これが誰を指すのかはわからない。通常、三朝法師といえは三人の皇帝に仕えた僧侶を指すが、ここでは誰かはわからない。そして西天国、大聖国の義浄三蔵の教文を伝えたとあるが、これでは義浄が西天国、大聖国の出身ということになる。

続いて (B) では、大聖国の大富長者、唐国の塩和尚、唐国の則貝相公、西天国の真表王、唐の登州の金顔の娘という五名の靈験が伝えられる。内容はいずれも本経を読誦したことにより利益を得たという内容である。この五名の身分は、それぞれ (B1) 居士、(B2) 僧侶、(B3) 貴族? (公とあることから)、(B4) 王、(B5) 女性であり、多様な人々に本経の利益があることを説いている。ちなみに (B5) 唐の登州の金顔の娘という設定は新羅を意識したものであろう。新羅時代、山東半島の登州には新羅人の町があり、赤山法花院では新羅式で儀礼が行われていたことは円仁の『入唐求法巡礼行記』に記されている。さらに娘の姓が金ということから彼女が新羅人であることが推測される。

そして彼らが得る利益としては、長寿、死後のすばらしいところへの転生、現世での富、のほか、僧侶ならば仏に見えること、王ならば在位の長いことなどが説かれる。

この靈験譚がどのような経緯で、誰が製作したのかはわからない。ただ、本経の受容が盛んになる中で本経の呪力を強調したいと考えた僧侶が製作したものと考えられる。これは前の序文と並び、朝鮮において本経の聖典化が促進された例と考えられる。

内容を見ると、現世での富貴と死後の善処への転生である。これまで『八陽経』自体や序文で見た土地建物関係や葬祭日程関係とは違った観点で靈的機能が述べられていることがわかる。

3-3 近現代の靈的機能

続いて近現代の靈的機能を検討する。近現代といっても、近代以後に出てきた考え方なのか、近代以前から存在したが、記録されたのが近代なのかという問題があることに注意する必要がある。

(1) 幽霊退治

これは『八陽経』の力により幽霊を退治する話である。韓国の20世紀民衆生活史研究団というグループは、20世紀を生きた市井の人の暮らしを探るためインタビューを行い、

昔の暮らしの様子を記録しシリーズとして刊行しているが、その中、1928年生まれの安星萬（アンソンマン）という人が昔を振り返る中で、『八陽経』の幽霊退治について次のように語っている。

ある女性が子供を生むために占い師に見てもらおうと、その女性には幽霊が憑いており一大事だということで、『天地八陽経』により幽霊を追い出すことになった。仕方なく、女性が読経する人をお願いして幽霊を追い出すための方法を使った。読経する三人の人が瓶の蓋を開けておき、『天地八陽経』を読みながら幽霊に瓶の中に入れてというのである。幽霊の眼には経を読む三人が、家を建てる大工に見え、瓶はすてきな家に見えるということであった。そこで継続して読経を行いながら幽霊に、「その素敵な家に入って見学してみる」と誘うと、結局、幽霊が瓶の中に入り、その瞬間、人々が瓶の入口を押さえ、悪いものはここに収めた。幽霊を対治したという内容の話である。⁸

『八陽経』の力により、女の人に憑いていた幽霊が錯覚を起こし、女の人から離れるという内容である。ここで出てくる読経をする人は盲僧かもしれない。同様の事例は『韓国民俗文化大事典』にも「死者が影響を与えて病気を起こしている場合、『八陽経』を読む⁹」という記述がある。ここで『八陽経』に認められた霊的機能は、邪鬼の退散の力ということであろう。経典そのものには邪鬼を退散することは説くが人に憑依した霊を祓うことは説かれていない。『八陽経』の信仰が高まるにつれて、エクソシストのような霊的機能が付加されたものと考えられる。これは現在でも続いており、ネット上では、幽霊に悩まされている人に対して、『八陽経』で退散させる方法が説かれている¹⁰。

(2) 死後の世界への影響力

もう一つ紹介する。これは1927年に韓国近代の仏教雑誌『仏教』に掲載された話である¹¹。李鍾震という僧侶が、慶尚南道の蔚山に住む李奎鉉に呼ばれた。話を聞いてみると、数年前に亡くなった奎鉉の息子の根洪が、あの世から親に対して、自分のために『八陽経』を読んでほしいと願ったという話である。そして、それを奎鉉に伝えたのは、一度死んで生き返った青年である。めずらしいので紹介することにした。不明な部分を除き大意

8 ミオクハン『安星萬 1928年10月12日生まれ』（20世紀民衆生活史研究団、ヌンピッ、2005年）pp.233

9 『韓国民俗文化大事典』（上巻、504頁）

10 NAVER 知識 iN 「Q 幽霊を退治する方法をご存じの方・・・」には次の方法が説かれる。まず退魔のお札と赤い唐辛子を購入する。唐辛子をよく乾かしてから燃やす。唐辛子の陽の気を幽霊は嫌うという。またお札を部屋に貼り、寝るときに一枚身に着ける。最後に『楞嚴呪』か『八陽経』をインターネットで探し、それを聞く。https://kin.naver.com/qna/detail.nhn?d1id=6&dirId=6130106&docId=230003372&qb=6reA7IuglO2MIoyWkeqyvQ==&enc=utf8§ion=kin&rank=1&search_sort=0&spq=0（2019年10月1日閲覧）

11 李鍾震「『八陽経』を読んでくれと（不思議）—非人間的別界から現存する父母に」（『仏教』59号（仏教社、1927年）pp.55-57）

を翻訳すると次のようになる。

私がこの事実を聞いたのは慶尚南道蔚山郡西生面鎮下里の李奎鉉（イギュヒョン）氏の家の応接室で、時は今を隔たること9年前（仏紀2948年）、冷たい風がまだ吹き、明るい月は登り李奎鉉氏の応接室の窓から静かに照らしてくれる旧暦の正月十五夜の時でありました。

その夜に私は李奎鉉氏の請いを受けて応接室の門前に足を止めると、氏は喜んで私を迎えてくれました。座席は応接室の一角に定め、顔には未曾有の笑顔が浮かんでいました。「李根洪の霊駕の不思議幕」を開き説明の端緒が解かれ始めました。

鍾震さん！私は私の愛する息子、私の大切な息子、私の得難き息子である根洪が無情にも数年前に世を去り、どこにいるのかわかりません。寡婦になった根洪の妻は往生極楽せよと至誠に仏前に、心祝する白髪の老人である根洪の老母—私は果して声のない涙と切ない恨みで過ごしておりました。

ところで数日前、ほぼ三十歳くらいに見える青年がわが家を訪れ、このような問答を行いました。

・青年 私はここから約二十里になる蔚山郡〇〇郡〇〇洞に住む〇〇〇（住所と姓名は筆者が忘却）でございます。あなた様のお名前は李奎鉉氏ですか？

・奎鉉 はい、そうです。

・青年 ならばあなた様の子弟は何人でございますか？

・奎鉉 ただ一人です。数年前に亡くなり、いまはその代わりに養子をもらいました。

・青年 亡くなった子弟のお名前は根洪ではありませんか？

・奎鉉 はい、そうです。

・青年 根洪の親御さんは、根洪のために仏前に功をたくさん積まれましたか？

・奎鉉 はい、そのようなこともありました。

・青年 あなた様の近所に申氏という親戚がおりますか？

・奎鉉 はい、おります。どうしてそのように詳しくご存知なのでしょう？

・青年 はい、私がこのようにお尋ねするのは、私としては不思議な事実があるからです。あなた様に紹介してさしあげようと、お尋ねいたしました。その事実が、私が

聞いたのと間違いなければ話をさし上げ、そうでなかったら、お話ししない考えで
おりました。まず住所、氏名、事実がすべて符合するので、ゆっくりと話してさしあ
げます。

・奎鉉 それで、どんな話でしょうか。

・青年 私は約一週間前にこの世を離れ、また生き返った人間なのです。ところで、(訳
者中：死後の世界で)あるところに入ると、紅衣(袈裟のようだ)を着た若い大師が
お一人いらっしゃり、その横には、年齢がほぼ四十歳前後に見える人が事務机のよう
なものところで事務をしておりました。その横には大・中・小の瓢箪三つが壁の上
に吊るされておりました。そして、その四十歳前後に見える人が私に言うには、

「あなたが入ってくることはわかっていました。でも、まだ来る時ではありませ
んの、また家にお戻りなさい」

と言って、案内をしてくれる途中、大きな瓢箪を指しながら、

「これは私の父の福です」

中位の瓢箪を指しながら、

「これは私の叔父(前の問答中の申氏)の福です」

小さい瓢箪を指しながら、

「これはあなたの福です」

といい、そして依頼を行う言葉が次のようにありました。

「あなたはここから家に帰ると言うので、帰る時に(住所・氏名を教えながら)
私の家を訪ね、次の言葉を伝えてください。それはほかでもなく、私の父と私の
妻が、私のために仏前に功をたくさん積んでいるので、ここよりも少し良いところ
に行きたいのですが、行けない理由があります。それは私が数年前、私の叔父
さんに債務を負ったことがあるのですが、それを返すことができず、ここに来て
みると、叔父さんが債務を返してもらっていないという理由で、私の前程に妨害
となっています。どうか私の家に行き、『八陽経』を読んでくれるよう勧めてく
ださい。お経だけ読んでくれれば、叔父さんと私は同時に所願を成就することが
できます。どうか忘れずに我が家を訪ねてください」

ということでした。

私はその依頼を受けて家に帰りました。

あの世から再び人間界に戻った私を見た親戚は、一辺には涙、一辺には笑いの一大

劇場を繰り広げました。しばらくして別世界で見た話を親戚にしてみました。ところで、話をして数日、普通に生活をしていたら、その後に二度も夢のような国で根洪に会い、怒られたこともありました。たとえ夢であったとしても、二度も依頼を受けたので、他の人に話して見ると、その人たちが言うには、

「西生面鎮下里に李奎鉉氏が実際、住んでおり、また根洪の母が仏前に献供をたくさんしたのも事実なので、君は信じようが信じまいが、一度、訪問して話をしてみなさい」ということなので、私はあなた様のお宅を訪れたのであります。

李奎鉉氏はその不思議の幕をここで展開し、私(李鍾震)に『八陽経』を読むことを請うので、私もまた不思議に感動し、ついに根洪の霊のために、また法界衆生のために敬虔な気持ちで『八陽経』を読み、仏前に祝願まで行い、帰ってきました。

最後に、この事実は私が実見したものであり、少しも伝聞ではない真実です。宗教家ではない科学者は何というのでしょうか。

ここには幽霊などは出て来ないが、『八陽経』を読誦することにより、その力が死後の世界に影響を与えるという。この話の真偽は問題ではなく、重要なのは、『八陽経』にそのような力があるとの話に出てくる人たちが信じているということである。この機能も、幽霊退治と同様、『八陽経』の信仰が高まるにつれて付加された霊的機能と考えられる。

4 結 語

本稿では朝鮮半島における『八陽経』の霊的機能について考察を行った。その結果は次のようにまとめられる。

1. 『八陽経』ではその読誦により様々な功德が得られるという霊的機能を説くが、その中心は、土地家屋関係と葬祭日程関係の二つである。
2. 朝鮮で作られたと考えられる『八陽経』序文にも様々な霊的機能が説かれるが、『八陽経』自体と同様、土地家屋関係と葬祭日程関係の二つに集約される。また八部神将のはたらきが強調されている。
3. 1791年に朝鮮で作られた靈験譚「八陽経密伝」では、様々な階層の人の現世富貴と死後の善処への往生を説く。
4. 近代の資料にみられるものでは、鬼神(幽霊)退散の効果、死後の世界の問題の解決といった機能も説かれるようになる。これらは『八陽経』の力が信じられる中で付加されていった霊的機能であると考えられる。
5. 冒頭で見た、天地八陽神呪経会の説く霊的機能は、①霊的存在の守護、②病苦の解決、③引越し増改築といった家関係、④悪家を吉家に転換する、の四点であった。この中、

①は『八陽経』序文に説かれた八部神将が影響したものではないかと考える。③は『八陽経』自体にも説かれていたもので、おそらくこれが朝鮮半島で『八陽経』が流行した最大の理由であろう。家の吉祥を説く④は③の延長と考えられる。

最後に、『八陽経』は巫俗の儀式である「クッ」の中で用いられるが、そこにおける『八陽経』の位置づけについては今後の課題とする。

〈参考文献〉

1 一次文献

- ・『天地八陽神呪経』朝鮮版本
- ・李鍾震「『八陽経』を読んでくれと（不思議）—非人間的別界から現存する父母に」（『仏教』59号（仏教社、1927年）
- ・ミオクハン『安星萬 1928年10月12日生まれ』（20世紀民衆生活史研究団、ヌンピッ、2005年）
- ・チョンチョンスニム『天地八陽神呪経』（天地八陽神呪経会、1999年）

2 二次文献

- ・佐藤厚「朝鮮半島における偽経『天地八陽神呪経』の流通と特徴」（『東アジア仏教学術論集』8号、東洋大学東洋学研究所、2020年）

〈キーワード〉

『天地八陽神呪経』、靈的機能、靈驗、鬼神（幽霊）退散、死後の世界、